

# オンライン授業と集中講義形式の対面授業を 組み合わせての実施

－コロナ禍における「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」の展開－

Developing a Course of “Teaching Method of Special Activities  
and Integrated Studies” in the time of COVID-19:  
Combining Online and Face-to-Face Intensive Classes

渡邊 幸雄

WATANABE Yukio

## 1. はじめに

2020年度の本学の授業形態は、コロナ禍の影響により、例年実施している状況とは大きく異なるものとなった。また、筆者の担当している科目では、2年次後期に開講する「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」が、再課程認定後、初めて授業をする科目であった。昨年度までの「特別活動の指導」においても、総合的な学習の時間<sup>1</sup>については、特別活動と関連することから、1コマ分をあててとりあげていた。ただし、あくまでも特別活動が中心であった。

2020年度からは、総合的な学習の時間の「意義と原理」、「指導計画」、「指導と評価」について、それぞれを独立した項目として1コマをあてて取り扱うこととし、特別活動と総合的な学習の時間にそれぞれ関連するコマ数も、ほぼ同等で実施することとしていた。さらに、昨年度までの特別活動関連でおこなってきたグループワークも、総合的な学習の時間関連でもできるだけ取り入れながら実施しようとする授業の初年度になるはずであった。

本稿は、このようにグループワークに重点をおく科目をコロナ禍の中でどのように実施していったかも含め、コロナ禍の中で、開講初年度の「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」をどのように展開したかに焦点をあて、記録という意味も込め、

---

<sup>1</sup> 「高等学校 学習指導要領（平成30年告示）」では、「総合的な探究の時間」であるが、この稿では、仙台城南高等学校に関連する部分の記載を除いて、開講科目名の「総合的な学習の時間」で記述を統一している。

振り返って報告することにより、次年度以降の授業改善につなげていこうとするものである。

## 2. コロナ禍の中での担当科目の授業状況

### 2-1 複数で担当している授業科目

まず、「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」の授業状況を記す前に、筆者も含めて複数で担当している科目の授業の状況について記す。

教育実習については、実施も危ぶまれたが、実習校の理解と配慮を得られ、ほとんどが時期をずらして秋での実施となり、無事終了できたことはなによりであった。このほか、教職の授業で筆者が関わっているもののうち、複数で担当しているものは、「教育実習事前・事後指導」と「教職実践演習」である。

3年次後期から開講される「教育実習事前・事後指導」については、例年実施している「仙台城南高等学校（以下、仙台城南高校）一日実習」がコロナ禍により中止となったことは残念であったが、その分を模擬授業に振り替え、模擬授業の回数を増やすことで対応し、より丁寧な指導を心がけた。例年よりも、開始時期が遅れたが、その結果、教員採用試験を突破した4年生に、教育実習の状況や、学習指導案も含めての授業実践、さらには、教員採用試験に向けてどのように対策を練り、実行したかなど、例年より丁寧に説明してもらうことができた。模擬授業に入る前の第1回の授業に設定したこともあり、学生の意識の向上に資すること大で、その後の模擬授業にもいい影響を与えたと思われる。

4年次後期開講の「教職実践演習」の講義の部分は、オンデマンド方式で動画等を視聴し、レポートを提出する形式とした。例年行っている「宮城県聴覚支援学校一日実習」がコロナ禍で中止となったことは、学生にとって非常にインパクトの大きい実習内容だけに非常に残念であった。これについては以下のように変更した。例年、振り返りにあたる内容として、「良い授業とは」を題材に、その年度の学生が話し合っ  
てまとめる、いわばディスカッションの時間をとっているのだが、それに先立って、教育実習終了の時期により学生を3グループに分け、中島准教授が中心となり Teams を用いて、まずグループごとにリモートでディスカッションを行った。一日実習の代替ということもあり、その分のコマを使い詳細に行ったということになる。そして、11月の最後の授業を対面で行い、グループごとの報告と履修者全体としてまとめるという内容に変更した。そしてそのうえで、教職課程全体の振り返りを行った。教育実習をやりきった高揚感と、久しぶりに集まって全員と顔を合わせたという喜びからか、非常に熱気に満ちた授業となった。それは、学生にとっても、私たち教員にとっても

思い出深い授業となった。

## 2-2 単独で担当している授業科目

次に、単独で担当した授業について記述する。2-1で記した授業は、ほとんど後期に実施したものであるが、1年次の「教職概論」、2年次の「生徒・進路指導論」は前期での開講であった。前期においては、4月27日（月）からオンライン授業が開始された。当初、対面授業は全く行われず、オンライン授業のみの開講であった。

「教職概論」は、教職の意義や教員の役割を理解することとともに、教職課程全体のガイダンスのような意味合いを持つ科目である。資料を事前にWeb Classにアップし、オンデマンドで、録画した動画を視聴するという授業スタイルをとった。筆者もリモートでの授業は初めての経験であり、メールや課題レポート等で双方向性を確保しようと努めたが、例年の対面の授業と比べてどこまで理解が深まったか、自信のないところである。

6月以降、一部科目で対面での授業が可能になり、「教職概論」においても最後に、「試験だけは対面で」と計画していたが、7月に学外ではあったが本学学生のクラスタが発生したこともあり、試験も含めてすべてリモートでの実施となった。結局、1年生とは一度も実際に顔を合わせることなく、授業は終了ということになった。

「生徒・進路指導論」もほぼ同様である。また、この授業においては、例年、生徒指導を行う上での教育課題を具体的に取り上げており、「①不登校」、「②いじめ問題」、「③体罰」、「④ネット関連の問題」、「⑤児童虐待」については、それぞれ1コマをあて、学生がグループごとに調べてきたことや考えを発表してから、それを補足するという形式ですすめてきた。これは、その後の教職課程における様々なグループワークの中で最初に行うものであり、「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」におけるグループワークにもつながるものであったが、今年度はそれもできなかった。

## 3. コロナ禍における「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」の展開

「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」は、2年次後期に開講される。

今年度の後期の授業については、特別編成の時間割となり、各科目とも1コマ100分の授業12回プラス課題等による評価ということになった。一部で対面授業も可となったが、教職科目については、基本的にオンライン授業で行ってほしいということであった。また、各入試の前など学生が入構できない日も何日か設けられていた。

このような中で、グループワークも含めてどのように授業を行っていくかを計画した。

【表1】「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」授業計画

第1回：授業のねらいと進め方
第2回：特別活動の意義と目標
第3回：特別活動の内容①「ホームルーム活動」
第4回：特別活動の内容②「生徒会活動」「学校行事」
第5回：部活動
第6回：特別活動等の課題（グループワーク 以下GW）
第7回：特別活動の指導法①（ホームルーム活動）（GW）
第8回：特別活動の指導法②（ボランティア活動）（GW）
第9回：総合的な学習の時間の意義と原理
第10回：総合的な学習の時間の指導計画
第11回：総合的な学習の時間の指導と評価
第12回：総合的な学習の時間の指導計画作成（GW）
第13回：グループ発表と相互評価（GW）
第14回：総合的な学習の時間の指導計画の修正
第15回：まとめと試験

まず、シラバスの授業計画を記した【表1】で、第1回から第5回及び第9回から第11回までの計8回分を6コマ分のオンデマンドの授業とした。そして、第6回から第8回の特別活動関連のグループワークと第12回から第15回の総合的な学習の時間関連のグループワーク及び試験を対面授業の集中講義で行うこととした。これは、リモートによるグループワークを行う力量が筆者にないことが最大の理由であるが、同時に「生徒・進路指導論」でできなかったリアルな場面でのグループワークを、2年次のこの時期に1回は行っておきたかったということも大きい。コロナの状況も注視するという条件付きではあったが、集中講義形式の対面授業も認められた。

### 3-1 オンデマンド授業形式のオンライン授業

双方向という点で、前期の「教職概論」、「生徒・進路指導論」の反省に基づき、毎回、課題を出して、メール本文に記入して提出してもらうことにした。課題は、次回取り上げる内容について、学生の主に高校時代の体験、経験をもとに記すもの、また考えを問うものである。

例えば、ホームルーム活動であれば、「自らの高校時代、どのような活動を行い、

印象に残っていることは何か、その理由はなぜか」というものである。また、生徒会活動であれば、「不活発な生徒会活動を活性化するために、顧問になったとしてアドバイスする」というようなものである。これを授業に前もって、メール本文に記して提出してもらい、これをまとめたものもその回の講義資料の一部とした。匿名を希望する学生は、「匿名希望」ということで掲載した。

今年度の受講者の人数も少ないこともあり、締め切り前に届いたものは、全文ではなく抜粋したものもあったが、とにかく全員分掲載することとした。これは、学生が自分のメールが届いているという確認にもなった。どのような活動を行ったかということを知りたいは、「自分がやってきたことのねらいは何だったのか、特に学習指導要領ではどこにあたるのか、また、やってこなかったことは何なのか」に具体的に気づいてほしいということである。少なくとも学生の記載したものからは、例えばホームルーム活動について言えば、学習指導要領の「第2 各活動・学校行事の目標及び内容」〔ホームルーム活動〕の「2 内容」で、「(1) ホームルームや学校における生活づくりへの参画」や「(3) 一人一人のキャリア形成と自己実現」については概ね十分というところである一方で、「(2) 日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全」については、かなり不足していることが見えてくる。加えて、教員や顧問の立場に立って考えるということにも、徐々にシフトして行ってほしいという願いもあった。

「どのような活動を行い、印象に残っていることは何か、その理由はなぜか」ということは、学校行事、部活動、総合的な学習の時間についても行った。ただ、本学の場合、工業高校出身者を中心に、総合的な学習の時間を「課題研究」で代替してきた学生も多く、その場合は、「自分にとってプラスになっていること」を聞く内容にした。このようなことから、「総合的な学習の時間の意義と原理」の講では、「総合的な学習の時間」の代替として「課題研究」が行われていることや、その条件などにも触れている。また逆に、普通高校等の出身で、工業高校のことがイメージできないまま、「工業」の免許取得を目指す学生も少なくない。そのため2017年度から、「仙台市立仙台工業高等学校一日実習」を行ってきた。今年度、コロナ禍で中止となったことは、これもまた残念なことであった。

オンライン授業の中で、総合的な学習の時間に関連することは、2コマ分とりあげた。まず、「総合的な学習の時間の意義と原理」の中で、背景や目標、加えて内容について講義した。学生の高校時代に行ってきたこととしては、職業や大学についての調査など進路関係が多い。さらには、自分史の作成や広瀬川の環境調査・美化などもあった。

「総合的な学習の時間の指導計画」と「総合的な学習の時間の指導と評価」については、まとめて1コマ分をあて、概要を講義した。課題として、サイトにアクセスし

て、「NHK 高校講座 総合的な探究の時間」の動画の一部を視聴し、参考になった点をまとめるレポートを課した。前回の「内容」を説明するときにも、いくつかの高等学校の例をあげたが、さらに良質な動画を視聴することによって、計画作成や実際の指導場面をイメージするのに役立つと思ったからである。また、課題研究で代替してきた学生が、総合的な学習（探究）の時間のイメージをつかむことに役立つと考えたからである。「生徒の主体性を尊重し、そのうえでアドバイスをしていきたい」ということを記載した学生がいた一方で、「このように個々の生徒一人一人への対応は、クラス単位で実際に可能だろうか」という疑問を記載した学生もいて、予想していた以上に、深く視聴していたことが感じられ、頼もしい限りであった。

また、学習指導要領にも、「目標を実現するにふさわしい探究課題」として、「国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題」とあるが、これらに関わるまさに、地球的規模での目標としてSDGsについてまとめ、触れることにした。まさに、現在のトレンドであり、多くの学生はなんとなく知ってはいるというところであろうが、この機会にしっかり自身の中でまとめておくことを目指した。授業の中ではMDGsからの流れやSDGsの17の目標を詳細に示したうえで、「なぜSDGsがMDGsと比べより注目されているか」を考えるという流れにした。加えて、本学の関わりについても紹介するとともに確認した。本学では、主に、「①防災・減災技術研究拠点」、「②医工学・健康福祉研究拠点」、「③地域・地場産業振興研究拠点」の3つの研究拠点を中心に取り組んでいる。

### 3-2 集中講義形式の対面授業

集中講義では、【表1】の「第6回：特別活動等の課題」、「第7・8回：特別活動の指導法①・②」、「第13回：グループ発表と相互評価」をグループ活動で行うこととした。また、「第12回：総合的な学習の時間の指導計画作成」、「第14回：総合的な学習の時間の指導計画の修正」にあたる部分については、集中講義内で説明したうえで、個人課題とすることとした。集中講義の期間は、11月7日（土）、8日（日）の午後の2日間である。オンデマンド授業の終了が、11月6日（金）であり、日時を空けて開講したかったが、後期A日程の定期試験が11月中旬に組まれており、学生もその準備の時間が必要であろうし、11月21日（土）、22日（日）には、同じく2年次後期開講の教職科目「教育方法学」の集中講義が計画されていたことから、ここに組み入れた。コロナが比較的落ち着いた時期に行えたこと、また、天候にも恵まれたことなど、結果的にいい時期に実施できたと思っている。

個人課題とした総合的な学習の時間の指導計画であるが、授業のなかで扱うにしてもなかなか難しい題材である。これについては、以下のことを想定していた。

3年次の「仙台城南高校一日実習」では、探究科1年生の「探究基礎」1コマ（50分）を使わせてもらって、学生がグループで大学紹介を行う授業がある。なお、仙台城南高校の「探究基礎」は、2年次以降の総合的な探究の時間にあたる「探究Ⅰ」「探究Ⅱ」につながる科目として位置づけられている。大学紹介の中身は、「①大学で研究していること」、「②高校と大学の違い」、「③高校3年間で学んできてほしいこと」の3項目である。

シラバス作成の段階では、この計画作成をグループワークで実施する予定であった。これにより、学生は、1年後とは言え、実際に行う授業の学習指導計画を作っていくという、より現実感のある課題に取り組めるし、3年次に実際に授業を行う際にも、1年前の指導計画を参考にしながら、あらためて指導計画を作成するという一方で、短期間でより質の高いものを作成できることをねらいとしていた。このことの詳細については、参考文献【1】渡邊・中島（2018）を参照されたい。

ただ、今回の集中講義は午後だけの2日間であり、特別活動関連のグループワークもあることから、上記の総合的な学習の時間関連の活動は、十分に課題の内容や意図を説明し、さらには、過去の先輩たちの活動の様子のビデオを見せてイメージをつかむことをしたうえで、個人課題とした。

集中講義第1日目の前半は、以上の個人課題の説明と、オンライン授業第1回から第6回までの試験を実施した。なお、この日は、サッカー部の試合があり、重なって出席できなかった学生が2名いたことから、録画をアップして視聴できるようにした。この日の後半は、特別活動関連のグループワークの内容の説明、グループ分け、そして、過去の先輩たちの学生目線での大学への提案内容の紹介である。この活動の昨年度までについては、参考文献【2】渡邊（2020）を参照されたい。

グループ分けについては、今回初めてのグループワークであること、2日間で一応の完成を目指すこと、さらには、今年度の実質的な受講者が16名と少数であることから、名簿順に、すなわち、学科・学部で分けて3グループでの構成とした。また、課題は、「コロナ禍の中で大学に望むこと」と大枠を筆者が設定し、その中で、各グループの提案を求めるという形式にした。

例年であれば、課題の設定にも時間をかけて行っているのであるが、2日間という時間的制約もあり、さらには、今年度の特別な状況に対して、学生の声を反映させたものとして、これに関連するテーマを考えてもらうことにした。イメージをつかんでもらうために、先輩たちの過去の企画・提案を紹介した。そのうえで、グループごとに方向性を検討し、方向性と役割分担を定めるまでをこの日の目標とした。方向性を決めた上に、実際の作業まで進んだグループもあり、秋の日が暮れるのは早い中、遅くまで作業を続けるグループもあった。

翌11月8日(日)の工程は、各グループの制作の継続、発表準備、発表、相互評価である。前日のサッカーの試合で授業に出ることのできなかった2人も加わり、全員で取り組んだ。各グループとも作成の中心になる学生が、前日中にかかなり作りこんで来ており、完成も早く、午後3時前に発表、そして相互評価にまで進むことができた。

3グループの発表の内容は、発表順に、「①八木山キャンパスにおける学生食堂の改善」、「②授業日程のスケジュールリングの提案」、「③授業形態の統一化の提案」という3本であった。

①に関して、この時期は対面授業も行われていたが、特別時間割を編成し、学部・学年ごとに、そして曜日ごとに科目を絞ってのいわゆる分散登校のような形態であった。したがって、昼休みも、食堂の広さからみて、学生等の人数はかなり少ないように、筆者は感じていた。また、座席も一方向だけという感染対策を講じていた。ただ、このグループの学生は、授業終了直後には、食券販売機の周辺に人だかりができること、そもそも、食券販売機は不特定多数の人が触れていることなどを問題視しており、解決策として、電子マネーの導入や、混雑状況の可視化などを提案していた。教員の立場からでは、気づかないことも多いことをあらためて痛感した。

②は、個別に来る授業ごとの連絡や、授業日程を一つのカレンダーにまとめてほしいという提案であった。スケジュールリングのイメージを作るために、前日遅くまで活動していたのだが、非常に精緻なスライドを駆使した力作であった。これが軌道にのれば、コロナ後も便利ではないかということである。教員の立場からは、新たな負担が生ずることや、学生の自身で確認していく姿勢が薄れてしまうのではないかという危惧も抱いたが、一方で、現在の学生がたくさん個別の連絡に翻弄されている状況も理解しなければいけないと痛感させられた。

③は、オンライン授業と対面授業のメリット、デメリットをまとめ、併用よりも統一した方が学生の負担は少ないというもので、このグループとしてはオンライン授業に統一してほしいという結論であった。論理に少し飛躍があり、結論についても意外な感じもしたが、オンライン授業の利点や、現在の学生の感覚も、あらためて気づかされる思いであった。もっとも、学生の相互評価の中で、「グループワークなどの対人コミュニケーションを重視するような授業では、オンラインは不便な所が多い」という指摘もあり、筆者と同じように感じている学生もいることを確認できた。

各グループ発表に対する評価をまとめ、後日 Web Class に掲載し、その旨をメールで通知した。この日の授業が、事実上最後の授業になったが、オンライン上でさらなる補足を行えたということになる。

さて、それぞれのグループは、例年1か月近くかかる工程を、授業時間を拡大した

とは言え2日間で実施するという中で、テーマに沿った内容をコンパクトにまとめてくれたという印象である。今年度の選択者は、人数は少ないが精鋭であるとの感を強くした。

### 3-3 学生提出の個人課題から

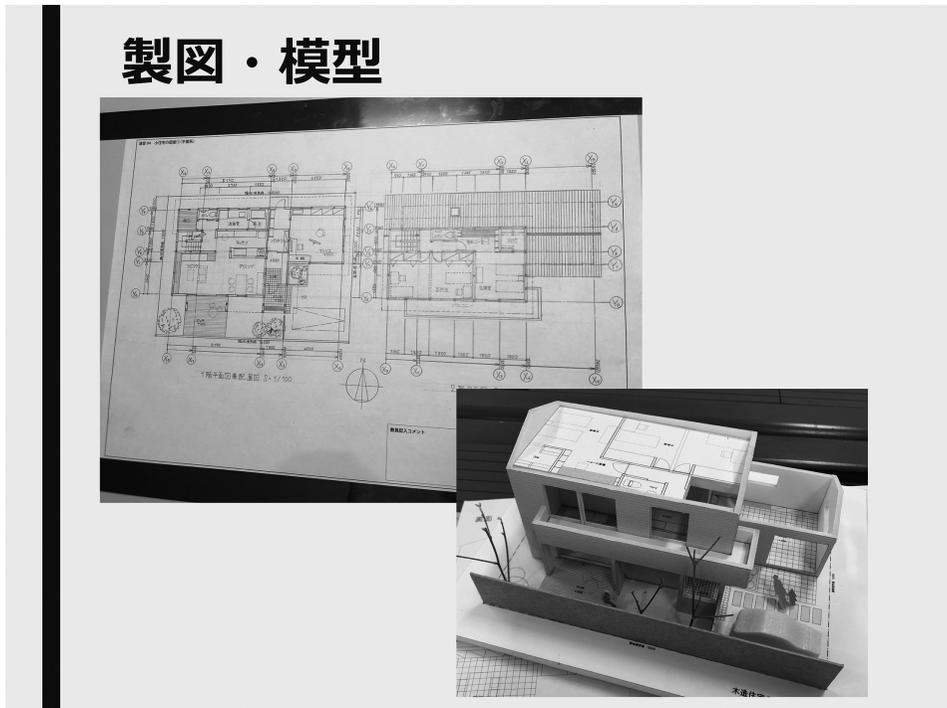
個人課題の内容は、3-2に記したように、「①大学で研究していること」、「②高校と大学の違い」、「③高校3年間で学んできてほしいこと」の3項目の中から、1つを選択し、それを、パワーポイントのスライドにまとめるというもので、ワードでのレジュメの作成も可とした。

提出した15名の内訳は、①が1名、②が10名、③が4名と、②が3分の2ほどであったが、②のなかでも、現在学んでいることを紹介していた学生もおり、これは①とも重なるであろうし、「大学での専門的な学習の基盤には高校で勉強していることが多い」と記した学生は③に重なるという具合に、明確に分けられるものではない。ただ、それを割り引いても、「②高校と大学の違い」が多かったということである。

個人課題については、完成度の高いものが多かった。ビデオを見せるなどしてイメージをつかんでから制作したということが大きいと思われる。逆に、それに引きずられて、似通った内容のものも散見され、なかなか難しいところであると感じた。以下、①から順に内容を紹介し、代表的なスライドも併せて掲げる。

#### ① 大学で研究していること

紹介するのは、ライフデザイン学部生活デザイン学科の学生のプレゼンである。自分の学んでいる分野（住まい系）とともに他の分野（暮らし系）の概要を紹介し、さらに、自分の学んでいる内容に進むというように、焦点化していく流れのスライドであった。建築学科との違いにも触れていて、どのような人におすすめかも記してある。高校生に向けて制作している意識が感じられる。また、自身の具体の制作物もあげてある。自身がしっかり考えて進路選択したことがみてとれる。学科の広報としても使えるようなプレゼンに仕上がった。【図1】は、その中で、学んでいる内容の具体例である。



【図1】「大学での研究」(学生のスライドから)

## ② 高校と大学の違い

これを選択した多くの学生が、大学や大学生には、自由や多様性があること、それに対応して、自己管理が求められることを挙げていた。頼もしく思うとともに、このことと真摯に向き合い、自立した学生が増えてくると、大学の雰囲気もさらにメリハリの効いたものになると思った。

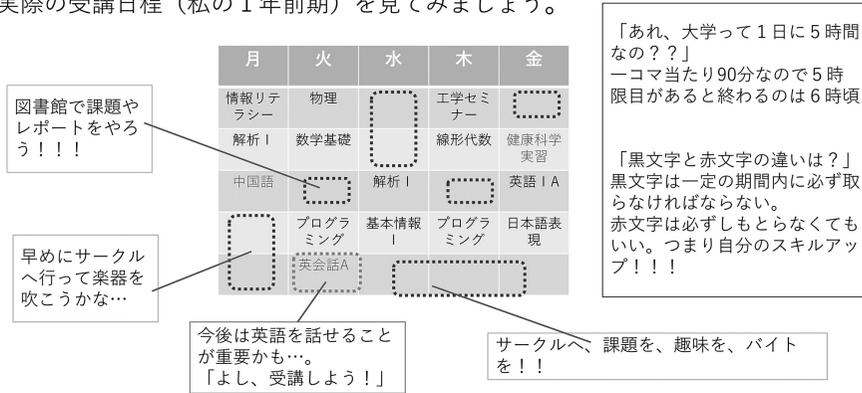
具体的には、授業形態、時間割、活動の制限、さらには長期の休みなどについてである。家事との両立をあげている学生もいた。確かに、一人暮らしの場合は、高校で自宅にいたときと大きく異なる。

【図2】は、履修する授業科目を選択して、時間割を作成していく状況を1枚のスライドにまとめたものである。このプレゼンは「1. 大学はどんなところ」「2. 授業形態の違い」「3. 施設・設備の違い」「4. 生活の違い」とバランスよくまとめており、施設・設備も写真入りで紹介していた。これまた大学の広報にも使えるような仕上がりである。

なお、これとは別に、必修科目と選択科目について、詳しく解説したものもあったが、これなどは、1年の初回の授業で使わせてほしいくらいの出来栄であった。

## 2.授業形態の違い（2）

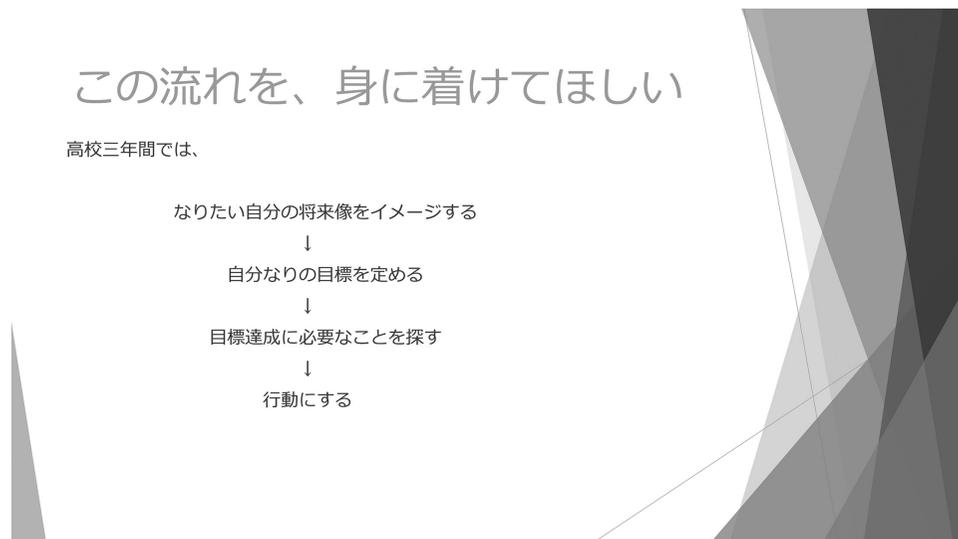
実際の受講日程（私の1年前期）を見てみましょう。



【図2】 「高校と大学の違い」 (学生のスライドから)

### ③ 高校の3年間で学んでほしいこと

英語、数学、物理などの具体的な教科名や情報収集能力などの力を、なぜ必要かということとともにあげた学生と、「今この瞬間を大事にすること」や「気遣いの気持ち」というような、姿勢や気持ちをあげた学生に分かれた。【図3】のスライドは、後者の例であり、自身の経験も踏まえて、説得力のあるスライドとなった。



【図3】 「高校三年間で学んでほしいこと」 (学生のスライドから)

このように、「仙台城南高校一日実習」での「探究基礎」の授業に向けたプレゼン制作を個人課題としたことで、探究型の学習との関連について重視する内容になった反面、講義内容も含めて、他教科との関連について十分でなかった点などが今後の課題として残された。また、評価についても、総合的な学習の時間関連では、オンデマンド授業の中での概要の説明にとどまり、演習の場で実際に相互評価を実施することはできなかった。

ただ、学生にとって大きな収穫として、この個人課題を制作することによって、自身の活動や学習していることをじっくり見つけ、省みる機会につながったのではないかと思っている。

#### 4 おわりに

次年度、時間割編成上からも、この「特別活動及び総合的な学習の指導法」については、オンライン授業をベースに組み立ててほしい旨の要望を受けている。今年度同様に、「オンライン授業と集中講義形式の対面授業を組み合わせるの実施」としたい。

今年度の「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」の授業については、コロナ禍という中で、迫られて構築した感のある授業形態であったが、グループワークを行う授業にとって、一つの現実的な提案になるのではないかと考えている。コロナ以降にも活かせるものも見えてきた。たとえば、対面の集中講義もビデオ録画をし、Web Class にアップすることで、集中講義初日をサッカーの試合で欠席した学生も後日視聴し、個人課題の内容等、より詳細に確認することができたはずである。また、学生のグループごとの発表もビデオで録画したことで、大学の関係者にも資料だけでなく発表の様子も観てもらうことができた。このことは、事前に学生にも話しておいたことであったが、張り合いにもなったようである。今後のコロナ禍以後の授業形態についても、必要なことは継続していくということになる。

対面授業でグループワークを中心に設定したことにより、学生の意欲やリーダーシップ、フォロワーシップも見えてきた。やはり、この方式で行ってよかったと思っただし、なによりも、今後、様々なグループワークを行う際の、学生間のチームワークの醸成に寄与したことであろう。このようなこともリモートの授業だけでは困難であった。

個人課題の部分について、3年次の「教育実習事前指導」の時間にグループでさらに練り上げ、「仙台城南高校一日実習」での実際の授業に臨むことになる。そのときにも、「総合的な学習の時間の指導法」で学んだことを活かしていけるよう支援していきたい。

今回の集中講義形式の対面授業は、なにより熱意のある集団の形成につながった。2021年度（2020年実施）の本学の教員採用の状況については、現役（大学4年）で教員採用試験後に名簿登載された数は3名（宮城、山形、福島各1）、さらには、2020年卒業の2名も宮城県で登載されるという成果をあげた。今年度のこの「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」を履修した学生たちを見ていると、少人数ながらも、これに続くような人材が集まっていると感じている。

#### 参考文献

- 【1】 渡邊幸雄・中島夏子（2018）「高等学校の「総合的な学習の時間の指導法」の授業開発」  
－仙台南高等学校との高大連携による東北工業大学教職課程の取組－ 東北工業大学  
教職研究紀要 第3号 pp.1-8.
- 【2】 渡邊幸雄（2020）「「特別活動の指導」におけるグループ活動」－大学生生活改善の視点を生徒会指導の演習に取り込む－ 東北工業大学 教職研究紀要 第5号 pp.7-15.